

由井常彦前文庫長を悼む

三井文庫の顧問で前文庫長・業務執行理事でおられた由井常彦先生が、二〇二四年十一月七日に、九三歳で他界されました。

由井常彦先生は、一九三一年六月に長野県南佐久郡で生まれ、東京大学経済学部、同大学大学院社会科学研究科経済史学博士課程修了ののち、明治大学経済学部講師を経て、同学部助教授、教授を歴任されました。その間、一九六五年に「中小工業政策の史的研究」で東京大学より経済学博士の学位を取得しました。一九九八年に明治大学を退職後は、文教女子大学教授となる一方、ロンドン大学、パリ大学、北京外国语大学客員教授などを勤め、一貫して日本経営史、日本経済史の研究領域で第一線の活躍を続けました。

一九九九年に山口和雄館長の後を継いで財団法人三井文庫理事・館長に就任し、二〇〇一年常務理事・館長、〇五年に三井記念術館が文庫に併設されるとともに常務理事・文庫長として二〇一二〇年六月まで二〇年間にわたり三井文庫の活動を指導されました。歌舞伎などの伝統芸能にも造詣が深く、それ故に三井記念美術館の所蔵する三井家伝来の茶道具などの美術品についても深い理解を示されていた先生は、美術館やその立地する日本橋の文化をとりわけ愛されていましたように思います。

本業の経営史の研究では、ヒルシュマイヤー教授との共著である『日本の経営発展 近代化と企業経営』（東洋経済新報社、一九七七年）において、経営史家としての地位を確立され、その後、『清廉の経営 『都鄙問答』と現代』（日本経済新聞社、一九九三年）などの近世期に遡る日本の経営的な特徴を思想史的な視点を交えて論ずる一方、『安田善

次郎 果報は練つて待て』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）などの財界人の人物伝をまとめるなど、枚挙にいとまがないほどの業績を残しました。また、日本経営史研究所の専務理事、会長として多数の会社史の編纂にも参画してきました。

三井文庫では、懸案であった『三井事業史』の完成に尽力されたほか、「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究」「団琢磨の民間経済外交」「明治期三井物産の経営者」などの論文を執筆して三井財閥研究に新しい頁を加えるなどの精力的な活動を続けてきました。また、その幅広い人脈を生かして三井文庫の財政的な基盤の充実にも心を尽くされました。

ここに由井先生の多年にわたるご教導のすべてに対しても、三井文庫職員一同御礼を申し上げるとともに、ご冥福を祈念いたしたいと存じます。

（文庫長 武田晴人）